
書評 黒田俊太郎著

『「鏡」としての透谷 表象の体系／ 浪漫的思考の系譜』

陳 璐*

1. はじめに

本書の著者である黒田俊太郎氏の専門は日本近代文学であり、浪漫主義を主たる研究テーマとしてきた経歴からみれば、北村透谷（1868-1894）をその研究の起点的な対象として選んだのは非常に自然なことである。黒田氏は本著『「鏡」としての透谷 表象の体系／浪漫的思考の系譜』（翰林書房、2018）において、透谷が日本浪漫主義の内部で如何に「鏡」として機能してきたかに着目し、そこから透谷以後の浪漫主義的な系譜にある中河與一や三木清、さらには保田與重郎ら日本浪漫派までを召喚し、浪漫主義をめぐる文学史的な言説の布置を描きなおす。

これまでの日本浪漫主義研究においては、昭和以後の日本浪漫派を考察した書物が多彩であるのに対し、明治初期という成立期を考察の重心に置いた研究は比較的少ない。評者の所見の限りでは、笹淵友一の労作『浪漫主義文学の誕生—「文学界」を焦点とする浪漫主義文学の研究—』（明治書院、1981）、吉田精一の『浪漫主義の研究』（東京堂出版社、1970）、片岡良一の『日本浪漫主義文学研究』（法政大学出版局、1958）等がその代表である。だが、それらの出版年月からも示唆されるように、明治期浪漫主義の研究は1980年代以後停滞しており、新しい研究書がほとんど出されていない状況にある。その理由の一つは、アーサー・O. ラヴジョイが語ったように、浪漫主義は内的に不一致な点が多い為、全体としての浪漫主義に絶対的な定義を付与するのが不可能なことにある¹⁾だろう。それゆえ、今までなされてきた日本浪漫主義の特質の帰納や定義と違う、新しい切り口が要求されつつある。

本書の特徴は、こうした滞っている研究状況を突き破ろうとし、浪漫主義的思想の内在的な不一致という変質の問題を、〈変容〉する透谷という課題に絞ることによって、日本浪漫主義の精神構造の一端を解明するところにあり、透谷という「鏡」に映じた自己の姿を俎上において観る人々自身に新たに分析のメスを入れることを通じて考察が行われている。

ここで援用されている「鏡」という手法は、黒田氏が序章で明確に語っているように、現象学的身体論で知られているフランスの哲学者メルロ＝ポンティ晩年の絵画論である「眼と精神」（L'Œil et l'Esprit）に由来している。「鏡」の手法は〈見る身体／見られる身体〉という「感覚的なものの再帰性」を増幅させるとメルロ＝ポンティは言う。黒田氏はこの「鏡」という発想を〈透谷〉の問題に引きつけることで、透谷について語る＝透谷という〈身体〉を〈想像的蘇生／想像的同一化〉するプロセスと捉え直し、そこで透谷について語った人々が、いかに彼が生きる時代の「表象の体系」を介して、“現在”では失われてしま

った“崇高の精神”を保持していた〈透谷〉という身体を想像的に蘇生したかを具体的にしようとする。

2. 本書の構成と概要

全体は序章と二部から構成されている。第一部「表象の体系としてのアンソロジー」と第二部「日本浪漫派と〈透谷〉」、各四章に分かれ、序章を合わせて全九章からなる。

近代日本浪漫主義の系譜を辿るためには、その系譜の起点を設定することが不可欠である。明治元年に生まれた詩人・評論家である北村透谷は、日本浪漫主義の先駆者という起点的な役割を担っている人物である。彼は、「日本の初期浪漫主義を牽引した雑誌『文学界』（明治26-31）を舞台として、多くの文芸評論を発表し、近代的な人間精神の自律と、そうした自律に至る唯一の方法としての「文学」という方法論的な位置付けを主張した。」

「こうした主張は、島崎藤村ら同時代の文学者のみならず、透谷の死後に亘って実に多くの人々に影響を与え、それらにより数多くの作家像（以下、〈透谷〉）が創出＝成型されてきた。」それゆえ、本書は透谷を「鏡」のような機能として把握し、〈透谷〉という記号を生成したメカニズムについて、透谷没後から昭和12年（1937）年頃まで追跡的に分析を行っている。その目的は以下の二つに要約できる。

「第一に、人々が〈透谷〉という記号に意味を充填するために必要となる物理的構成要素、すなわち、個人全集・文学全集という出版形態の出現や、作家の名を冠した文学賞の成立などに代表される、個人作家をめぐる近代的制度形成の問題を検討すること。

第二に、透谷を語り直す言説が、多くの場合、語り直す人間に内在する浪漫主義的思考の表明を含むものであったとすれば、〈透谷〉の変質を観察することを通じて、近代日本における浪漫主義の一つの系譜を辿っていくこと。」本書の第一部の「表象の体系としてのアンソロジー」では一つ目の問題に、第二部の「日本浪漫派と〈透谷〉」では二つ目の問題に重心が置かれている。

ミシェル・フーコーは『作者とは何か？』において、「作者とは、作品のなかでも、草稿のなかでも、書簡のなかでも、断片のなかでも……、それぞれに完成度の差があっても、同一の価値を担って、はっきりと顕現するところの、ある表現の中心だという考え方です。」²⁾と述べている。その「表現の中心」である「作家」という「統一性的原理」は、日本において、いつ、どのように制度的に形成されてきたのかという課題を、透谷を通して追及しようとするのが、本書の第一部「表象の体系としてのアンソロジー」の主旨である。

第一部では、まずこの主旨を、明治35年（1902）年版『透谷全集』の発刊と流通をめぐる出版界の動向を追うことで、明らかにしようとしている。その際、従来のテキスト論や同時代思潮との相関の検討には現れてこない、出版社同士が取り交わした「契約書」や、『透谷全集』の宣伝広告の戦略、また〈商品〉としての『透谷全集』をめぐる全国での流通状況に着目することで、著者は〈作家〉を資本として発見した出版社側の戦略的な見方を解明する。

黒田氏は、ここで検討の中心に据えられている『透谷全集』が、日本文学におけるアンソロジーの問題と深く関わっていると主張する。その理由について、黒田氏はこの全集が透谷

名義で発表された評論や詩、小説などを収集しただけではなく、「透谷子漫録摘集」として透谷の手紙、日記、未定稿といった私的な文章を収録した全集の嚆矢であるという点に捉えている。「個人全集」に収録可能となった私的文章としての「手紙」という視点をさらに展開し、明治30年代後半の『手紙雑誌』、『ハガキ文学』など、手紙に関するメディアと言説の状況を検討することを通じて、手紙がいかに〈文学〉化されていくかという変容を見ようと試みている。黒田氏は、『透谷全集』（明治35年）への「透谷子漫録摘集」載録という事態や、〈作家〉の私信までも容赦なく公開してしまう『手紙雑誌』（明治37—明治43）のようなメディアの出現が、人々の思考にそうした分割線＝歴史的断層を引いてしまう契機となったのだ」と記す。作家や文学をめぐる思考様式の変容において、『透谷全集』に収録された手紙という私的文章の公開が、一つの強力な契機をなしていたわけである。

上記の変容とともに変質した〈透谷〉像は、明治20年代頃に『文学界』の同人らが愛読したゲーテの『若きウェルテルの悩み』の流行が導いた〈エルテリズム〉（Wertherism）の言説編成に巻き込まれた。透谷が縊死してから11ヶ月後の明治28年4月7日に、作家である藤野古白がピストル自殺を企て、その5日後に実際死亡した。二人の自殺は厭世思想の流行という文脈で世間に広く語られ、それ故、この時期の浪漫主義も厭世思想と癒着して認識されていく。その後も〈エルテリズム〉という記号が明治36年の藤村操の投身自殺により再起動し、透谷もこのように自殺事件の文脈に召喚されることになる。言い換えれば、透谷没後から明治30年代後半にかけての〈透谷〉像は、透谷の実際の「作品」とはほとんど交渉せずに、透谷、藤野古白、藤村操ら一連の青年文学者の自殺事件と結びつけられることで、肥大化し、変質していった。

この部分の考察によって評者が受け取る重要な示唆は、今日まで続く「厭世」という死に繋がるネガティブ的な思想は、実はむしろ〈変質〉後の見方であって、透谷本来が主張した厭世思想とは異なるという事である。言い換えれば、透谷の厭世思想はこのような透谷像の変質によって歪んだまま世間によって受け取られ、正確に理解されてはいなかった。本来、透谷が主張する厭世家とは「社界の規律に遵ふこと能はざる者なり」、「繩墨の規矩に掣肘せらるゝこと能はざる者なり」（『厭世詩家と女性』『女学雑誌』1892・2）という社会の規則や規律に従わない姿勢を示す指標であり、世俗に規定された倫理や規則を懐疑し、批判する原理的な主体像である。それは、これまで主張されてきた消極的なベシミズムとは違う。透谷が本来考えた「厭世思想」という積極的なベシミズムとは何かを捉え直すことで、日本浪漫主義とは何か、その発生と生起をめぐる解釈を起点から考え直す契機になるはずである。

なお、明治以後に〈透谷〉像の変容を促した契機の一つは、昭和2（1927）年1月に『樋口一葉・北村透谷集』が『現代日本文学全集』の第二回配本として刊行されたことである。このいわゆる「円本」という媒体の刊行を契機として、透谷を語る言説は量的に拡大した。「円本」の刊行による〈透谷〉の変容は、単なる文壇内部の出来事に止まらず、プロレタリア文学者による透谷の偶像化という事態にも繋がる。黒田氏はこの事態に着目し、「円本」が惹起した〈透谷〉の争奪戦の様相を考察することで、佐藤春夫、蔵原惟人、中野重治らが想起する〈透谷〉像を明らかにするとともに、昭和期における相拮抗する二つの浪漫主義の潮流を分析している。

昭和10年前後になってから、透谷を特権化しようとする発言が繰り返されるようになる

が、その担い手は『日本浪漫派』の同人達であった。また、昭和12年に透谷を顕彰する組織である透谷会が結成され、透谷文学賞を設立したことが、透谷像を新たに召喚させる事情となる。第二部では、黒田氏はまずそうした事情に着目し、日本浪漫派の作家達にとって、〈透谷〉はいかなる鏡とされ、いかなる言論で透谷の思想が読み替えられたかを、作家ごとに検討している。

日本浪漫派の代表的な人物である保田與重郎は「明治の精神」や「他界の観念」、「透谷に関して」などを発表。繰り返し透谷評価した点で、無論見過ごすことのできぬ検討対象の一人である。ここでは黒田氏が保田を論じる際に提起した近代化論の問題が重要である。京都学派の哲学者三木清が昭和11年に提唱した〈ヒューマニズム論〉を分析する際にも、「三木の〈ヒューマニズム論〉は、明治以来の日本の近代化の過程を説明した〈近代化〉論と言い換えることもでき、翌年の日本浪漫派の人々を中心とする〈日本的なるもの〉を要求する主張に、近代イメージについての具体的な枠組を提供することになる。」と黒田氏は記している。

保田與重郎を始めとする「日本浪漫派」の時代は、近代そのものを批判の対象としていたのに対し、透谷が生きていた明治初期には、近代化はまだその端緒にあった。それ故、保田や三木らが透谷について語ることは、単に“現在”では失われてしまった“崇高の精神”を保持していた〈透谷〉という身体を想像的に蘇生する営みであるだけでなく、透谷を通して昭和という時点で明治が達成した近代を如何に考えるかという近代化批判にも繋がっている。この問題は浪漫主義の系譜学において重要な課題である。

なお、第二部に重点的に検討されるもう一人の対象は、著者があとがきで「7年間で最も集中的に検討してきたのは、日本浪漫派の作家としての中河與一についてだった。」と書いているように、昭和期に旺盛な浪漫主義的な言論を語った中河與一である。その際、中河與一の小説「数字数式の這入った恋愛詩」(『科学画報』昭和5[1930]年9月)が分析され、中河與一の〈初期偶然論〉が、透谷会を結成する〈永遠思想〉へと繋がる萌芽的思考と捉えられ、さらに、中河與一の昭和9年から昭和13年頃までの発言を収録した『偶然と文学』、『万葉の精神』、『日本の理想』を取り上げ、透谷会結成前後の中河の思考を分析している。

このように、「鏡」として透谷の成型と変質過程を追跡することで、透谷以後の浪漫主義的な系譜にある中河與一や三木清、さらには保田與重郎ら日本浪漫派までを召喚し、浪漫主義をめぐる文学史的な言説の布置を黒田氏なりに描き直している。

3. 浪漫主義研究補説

日本浪漫主義はいかに研究していくべきだろうか。本書はこの問題に新しい方法論を提供したと言えるだろう。従来日本における浪漫主義研究の多くは、まず浪漫主義をめぐる定義や概念にテーマを設定し、それを文学史的資料に投影させることで、明治20年代の『文学界』を中心とする運動を前期、30年代の『明星』派を中心とするものを後期とし、また40年代以降は『スバル』を中心とする新浪漫主義時代と捉え、日本浪漫主義を巡る史的記述を構築してきた。

61 (60) しかし、前提としての概念帰納は、もちろん後の時代の人々による把握であるため、その

時代の価値観に左右されがちであった。このようにして、各時代が獲得した認識や価値観によって、様々な〈透谷〉像が生産、再生産されてきたわけである。だがそのために、変質した〈透谷〉像を歪んだままに受け取った人々にとって、リアルな〈透谷〉、また明治初期の浪漫思想を正確に捉えることが困難になった。それ故、世間に理解されなかった彼の積極的な「厭世思想」、また明治期の浪漫主義の端緒の再考が、今後の日本浪漫主義研究に欠かせない課題となるであろう。

日本浪漫主義の端緒を考える際に、西洋をその起源として見ることで、比較文学的な視座で捉えることが常道となっている。しかし浪漫主義の発生に関する事情は、日本と西欧ではかなり違っていたことに注意しなければならない。

リュディガー・ザフランスキーは『ロマン主義：あるドイツ的な事件』の中で、浪漫主義の発端を「ヘルダーが1769年にフランスへの船旅に出た瞬間から語り始め」³⁾ることで、ドイツ的な事件というレッテルをロマン主義に貼り付けた。野口武彦が思想史的角度から提示したように、「ドイツにとってライン西岸のフランスは、たんにフランスという国家だけでなく、思想史的には啓蒙主義・合理主義・普遍主義の牙城であった。ドイツ・ロマン派に始まる文化的ナショナリズムはそれに対抗して形成されたのである。」⁴⁾ 所謂ロマンティシズムという思潮の起源は、ドイツから発した反啓蒙主義・反合理主義という運動であって、やがてイギリスやフランスなど他の欧米諸国にも広がっていき、ヨーロッパ全土を席卷した。近代日本における浪漫主義は、そうした西欧ロマンティシズムという起源を移植したものだとして認識されてきた。

しかし、神林恒道が『近代日本「美学」の誕生』の中で「日本の浪漫主義の奇妙さは、その発端からして相対峙すべき、西欧の古典主義やアカデミズムに比すべきものを持ちえなかったことにある。」⁵⁾と指摘したように、古典主義という西洋ロマンティシズムが対抗したイデオロギーが、日本においては不在であった。言い換えれば、日本の浪漫主義は西欧浪漫主義と違って、最初から抵抗の対象をはっきり見定めてはおらず、前の時代との関係性、同時代の他の思想との相互関係もはっきりとしていないものであった。

西欧の前ロマン主義時代を支配していたのは合理主義や古典主義であり、それらへの反抗として浪漫主義が発生した。日本においては、江戸時代という前近代を支配していたのは漢学や朱子学であった。それ故、文化的に違う土壌で浪漫主義がいかに育成され、流通したかという初期浪漫主義と前近代思想との関係が、まず検討すべき課題となるだろう。とはいえ、明治20年代に日本における浪漫主義の「起源」を設定することで、日本の近代浪漫主義は、それ以前の歴史や思想の文脈とほぼ無関係なものとさえ認識されてきた経緯がある。果たしてそのような設定が妥当かどうかを、改めて考えなければならない。

一方、近代日本文学の歴史において、浪漫主義文学と言えば、明治20年代から30年代の始めにかけての『文学界』における評論や文学がまず思い出されるにせよ、しかし彼らは、昭和10年に『コギト』を創刊した保田與重郎を始めとする「日本浪漫派」のように、自ら「ロマン主義」を標榜したわけではなかった。当時の『文学界』の雰囲気について、雑誌の中心メンバーの一人であった平田禿木は以下のように回顧している。

私共は何もロマンティシズムとか運動とかいふものを意識してやつたのではなく、唯同

じ傾向の者が偶然集まって、その書いたものを互ひに見せ合ふといった気持ちに過ぎなかつたのである。（『文学界の回顧』昭和9年3月）

平田の証言が明らかにするのは、この同じような傾向を持つグループである『文学界』は、後の歴史によって“浪漫主義文学”という概念でくられたという実態である。言い換えれば、明治初期のロマンティズムという呼称は、それに相当する主体によって規定されたものではなく、後の文学史によって「同じ傾向の者」を総括的に記述したものであり、後付けされた概念なのである。このことが、昭和期の浪漫主義研究に比べると、明治初期の浪漫主義研究が少ない理由の一つである。

我々は現在、「ロマンティック」という言葉に対して、抒情的、感傷的で甘美な雰囲気という共通の認識に到達しているが、例えば明治18年から19年に坪内逍遙が発表した『当世書生気質』の中で、彼はこの語を「小説稗史にあるやうなロマンテック〔荒唐奇異（奇態なこと）〕な事がしたいもので」のように用いている。音訳としての「浪漫」は夏目漱石の『文学論』（明治31年）を嚆矢とするから⁶⁾、明治30年代になってようやく浪漫という訳語が成立したことになる。そしてその同じ時期に、明治35年『透谷全集』の刊行によって「鏡」としての透谷も成立している。このように整理して見えてくるのは、むしろ「鏡」としての透谷が成立する前、言い換えれば、浪漫主義という言葉・概念もまだ整っていなかった明治20年代に、「浪漫主義」にまつわる観念がいかに語られてきたかという問題である。

4. おわりに

評者の専門上、本書から示唆を受けたことに加えて、北村透谷と浪漫主義研究についての私見などをやや補説したが、それは本書全体の持つ論理的可能性の広さゆえの展開であって、その可能性が胚胎している問題意識の厳密化であると考えている。

今の時代、北村透谷はあまり読まれていない詩人であり、忘れかけられている存在でもある。黒田氏の力作は、透谷の機能を「鏡」として捉えることによって、透谷がその後の浪漫主義の展開にどれほど重要な存在であったかという「史」的な位置付けを与えてくれる。

評者は、北村透谷と浪漫主義研究を専門とするものとして、本書の理論的視点を生んだ研究姿勢に尊敬と共感の念を持ち、本書が北村透谷研究、また日本の浪漫主義研究において必読の書になることを願うものである。

参考文献

リュディガー・ザフランスキー、『ロマン主義：あるドイツ的な事件』、津山拓也訳、法政大学出版局、2010年

神林恒道、『近代日本「美学」の誕生』、講談社、2006

野口武彦、『日本思想史入門』、筑摩書店、1993年

アイザイア・バーリン、『バーリン ロマン主義講義』、田中治男訳、岩波書店、2000年

笹淵友一、『浪漫主義文学の誕生—「文学界」を焦点とする浪漫主義文学の研究—』、明治書院、1981年

吉田精一、『浪漫主義の研究』、東京堂出版社、1970 年

小田切秀雄編、『明治文学全集 29 北村透谷集』、筑摩書房、2013 年

Arthur O. Lovejoy, On the Discrimination of Romanticisms, PMLA, Vol. 39, No. 2, Jun. 1924

註

- 1) Arthur O. Lovejoy, On the Discrimination of Romanticisms, PMLA, Vol. 39, No. 2 (Jun., 1924), p. 252. 「It is just these internal incongruities which make it most of all evident, as it seems to me, that any attempt at a general appraisal even of a single chronologically determinate Romanticism-still more, of "Romanticism" as a whole-is a fatuity.」
- 2) ミシェル・フーコー『作者とは何か?』清水徹・豊崎光一訳、哲学書房、1990 年 9 月、46 頁
- 3) リュディガー・ザフランスキー（著）津山拓也（訳）『ロマン主義：あるドイツ的な事件』法政大学出版局、2010 年 12 月、第一章「ロマン主義の発端—ヘルダー海へ出る」を参照。
- 4) 野口武彦『日本思想史入門』筑摩書店、1993 年 5 月、180～181 頁
- 5) 神林恒道『近代日本「美学」の誕生』講談社、2006 年 3 月、232 頁
- 6) 同上、222 頁